

自然と人の文化

多治見市文化財保護センターだより No.58 2021.10

企画展

古代の多治見

—古墳と集落遺跡—

古代の多治見市を考える上で、市内に点在する古墳や集落遺跡は貴重な資料です。古墳が造られたのは、北海道や東北地方北部、沖縄を除くと3世紀半ばから8世紀の初頭頃までで、多治見市域では古墳時代後期の6世紀に入ってから古墳が造られるようになります。多治見市には、岐阜県史跡に指定されている虎溪山^{こけいざん}一号古墳や狐塚古墳^{きつねづか}、多治見市史跡に指定されている池田1号古墳や虎溪山4号古墳などがあり、当地域の古墳時代後期を考える上で重要な古墳が点在しています。また、古墳の近辺には当時の人々が生活した集落の遺跡が見つかっており、古墳を造営した人々が住んでいたと考えられます。

本企画展では、多治見市内の古墳と多治見市周辺地域にある古墳から出土した遺物の産地などから、古墳時代における地域交流を紹介します。また、当時の生活の様子ที่わかる集落遺跡の出土品もあわせて展示しています。

企画展「古代の多治見—古墳と集落遺跡—」

期間 令和3年7月5日(月)～12月24日(金)

場所 多治見市文化財保護センター展示室

入場無料

須恵器 皮袋形瓶

虎溪山一号古墳 古墳時代後期

多治見市教育委員会所蔵

企画展 古代の多治見 —古墳と集落遺跡—

～虎溪山一号古墳～

虎溪山一号古墳は弁天町4丁目にある直径約16mの円墳で、岐阜県史跡に指定されています。6世紀前半に造られ、6世紀末まで使用されたと推定されており、多治見市域では最も早い時期に造られた古墳と考えられます。この古墳は、畿内の影響を受けた左片袖式の横穴式石室を有しているとされています。一方で、埋葬者が安置される玄室の入り口に段があること



▲ 虎溪山一号古墳出土 大刀類

などから、西三河の影響を受けた^{たてあなけいよぐらしき} 竪穴系横口式石室の特徴も指摘されており、石室構造から様々な地域の影響が窺えます。

この古墳からは、尾張の猿投窯で焼かれた須恵器のほか、土師器や鉄製品など多くの副葬品が出土しています。長さ約119cmの大刀や金銅装の馬具は、地域掌握を意図した畿内のヤマト王権によって配布されたと考えられており、埋葬者の権力の大きさを窺い知ることができます。

以上のことから、虎溪山一号古墳は古墳時代の多治見市域を代表する古墳であると言えます。

多治見市陶磁器展示 5 施設共同展示を開催！

多治見市内の陶磁器に関する展示施設である美濃焼ミュージアム、モザイクタイルミュージアム、文化工房ギャラリーヴォイス、陶磁器意匠研究所、文化財保護センターの5施設が共同で、ヤマカまなびパーク1Fオープンギャラリーにて展示を行いました。

各施設の特徴的な資料を紹介し、文化財保護センターのコーナーでは多治見市で大量に出土している山茶碗を展示しました。新型コロナウイルス感染拡大の影響で5日間のみの開催となりましたが、5施設が合同で開催した初の展覧会は、非常に見応えのあるものとなりました。



▲ 展示風景

多治見北高校の生徒が見学に来ました

7月26日に多治見北高校の生徒が多治見の文化を学ぶ高校図書館の講座で、文化財保護センターの見学に来てくれました。

企画展示の解説のほか、文化財保護センターの役割や学芸員の仕事などについてお話ししました。また、高校の近くにある岐阜県史跡・虎溪山一号古墳の、普段は入ることのできない石室内部で説明を行いました。歴史が好きな生徒や、地質に興味のある生徒たちから、専門的な質問も多く寄せられ充実した時間となりました。



▲ 企画展示見学の様子

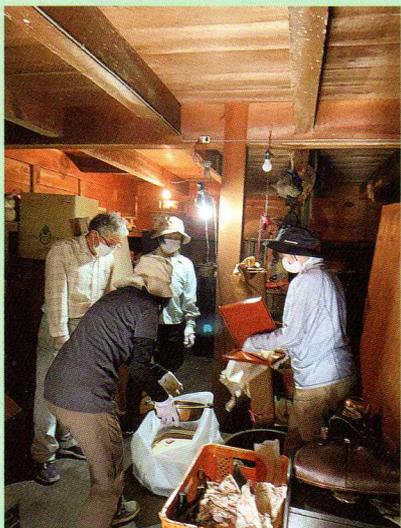


▲ 文化財保護センター倉庫見学の様子

旧陶器商の蔵にねむっていた民具や古文書

をご寄付いただきました！

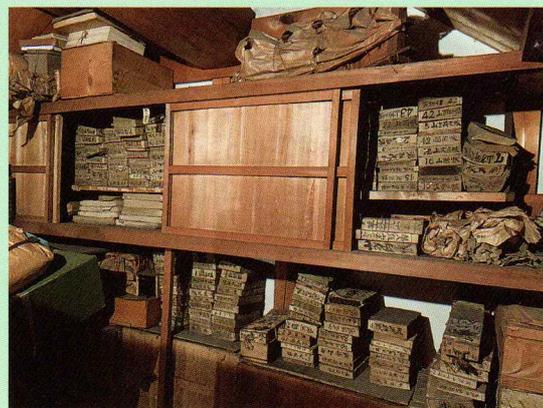
本町オリベストリートは明治時代から陶器商が軒を連ねる通りです。現在も陶器商の蔵や建物が残っており、かつての様子を伝えています。



▲作業風景

今年5月、多治見陶磁器卸商業協同組合から、明治時代創業の陶器商の蔵に、古い資料が多く残っているとの情報をいただき、組合と図書館郷土資料室、文化財保護センターで資料調査をはじめました。この蔵は大正2年に建て替えられた3階建てで、陶器類や漆器類、衣類、民具のほか、大正～昭和の勘定帳が大量に残されていました。そのほとんどが手かずの状態、近代の商家にタイムスリップしたような資料ばかりです。

現在のご寄付いただける陶器類や民具、古文書を1つ1つ確認しながら、蔵から出す作業を継続中です！



▲蔵にあった古文書

窯跡発見！

4月某日、多治見市北小木町の山中において中世の山茶碗を焼成した窯跡を新たに発見しました。

民間企業による工事に先立って実施した埋蔵文化財確認作業で見つかりました。試掘の結果、地表下30～40cmから窯体の痕跡である赤色被熱土^{せきしよくひねつど}を検出し、窯体の存在を確認しました。さらに周辺からは、この窯で焼成されたと思われる山茶碗が多く見つかりました。

工事が窯体に及ぼす影響が極めて少ないため、この窯跡はこれ以上の発掘をすることなく現状を保存していくことになりました。

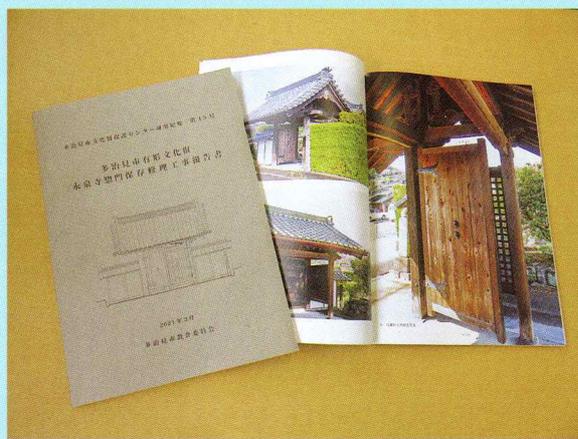


▲発見された山茶碗

研究紀要第15号を発行しました

今年3月に多治見市文化財保護センター研究紀要第15号が発行されました。本書は、平成28年度から29年度にかけて行われた多治見市有形文化財「永泉寺惣門^{えいせんじそうもん}」保存修理事業の報告書で、修理の際に監修を行った国立大学法人名古屋工業大学の麓和善教授^{ふもとかずよし}(当時)に執筆していただきました。屋根を解体した際に判明した内部構造や修理の状況を撮影した写真などが掲載されています。

研究紀要第15号は1冊1,200円で販売中です。ご興味のある方は文化財保護センターでお求めください。



▲研究紀要第15号の表紙と中身

令和3年度 北小木のホタル生息数調査の結果

市天然記念物に指定されている北小木のホタルについて、今年も6月初めから7月半ばにかけて生息数の調査を行いました。調査は、ゲンジボタルとヘイケボタルについて行いました。

今年の調査日の中で最も多くの発生数(各調査地点の最大発生数の合計)を計測できた日は、6月10日(調査第2日目)でした。同日の前後の調査日においても多く計測できており、6月前半が発生のピークでした。また、調査地である北小木川の上流部^{※1}と下流部^{※2}の発生数を比較してみると、上流部は下流部の約2倍になりました。下流部の特徴として、より下流の調査地点ほど発生数の多い日が遅くなるという傾向が今年も見られました。



▲北小木のホタル(ゲンジボタル)

昨年までの調査結果によると、北小木のゲンジボタルは3年から4年の周期で大発生を繰り返しているため、今年も昨年と同様に大発生はないという予測をしていました。結果は合計993匹(去年は411匹、一昨年は1502匹)となり、一昨年のような大発生はやはり見られませんでした。来年以降の調査結果によって、周期の傾向が少しずつ判明していくと考えています。また、水田に生息するヘイケボタルの発生数は合計16匹(去年は31匹、一昨年は102匹)という結果で、例年よりも少なくなりました。

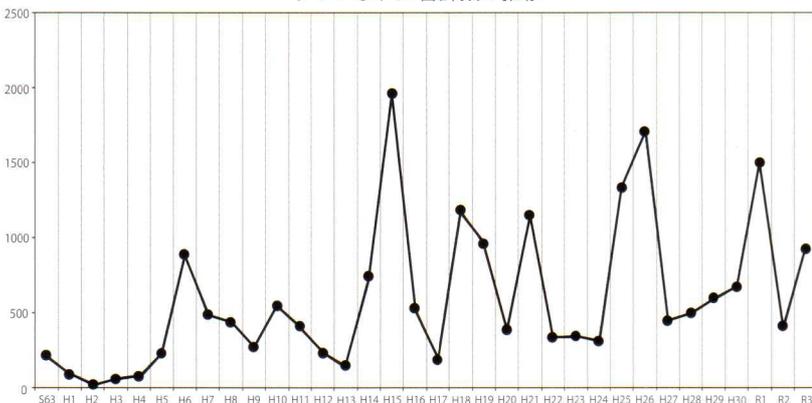
よりも少なくなりました。

この貴重な北小木のホタルを守っていくため、今後もホタルの生息環境の保護に努めていきます。

草刈などのボランティアにご参加いただいた方々、北小木町の方々、関係者の方々に心より感謝申し上げます。

※1※2 天王橋を境に上流部と下流部に分けている

ゲンジボタル合計数の推移



多治見市文化財保護センター

〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘 10-6-26
 TEL(0572)25-8633 FAX(0572)24-5033
 E-mail:hogo-cen@city.tajimi.lg.jp
 ホームページ : <https://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/>



twitter



instagram



〈利用案内〉 開館時間：9:00～17:00 (最終入館 16:30)

休館日：土・日・祝日、年末年始

入場無料

〈交通案内〉 タクシー：多治見駅から約 20 分

バス：東鉄バス「美濃焼団地前」下車 徒歩 5 分

